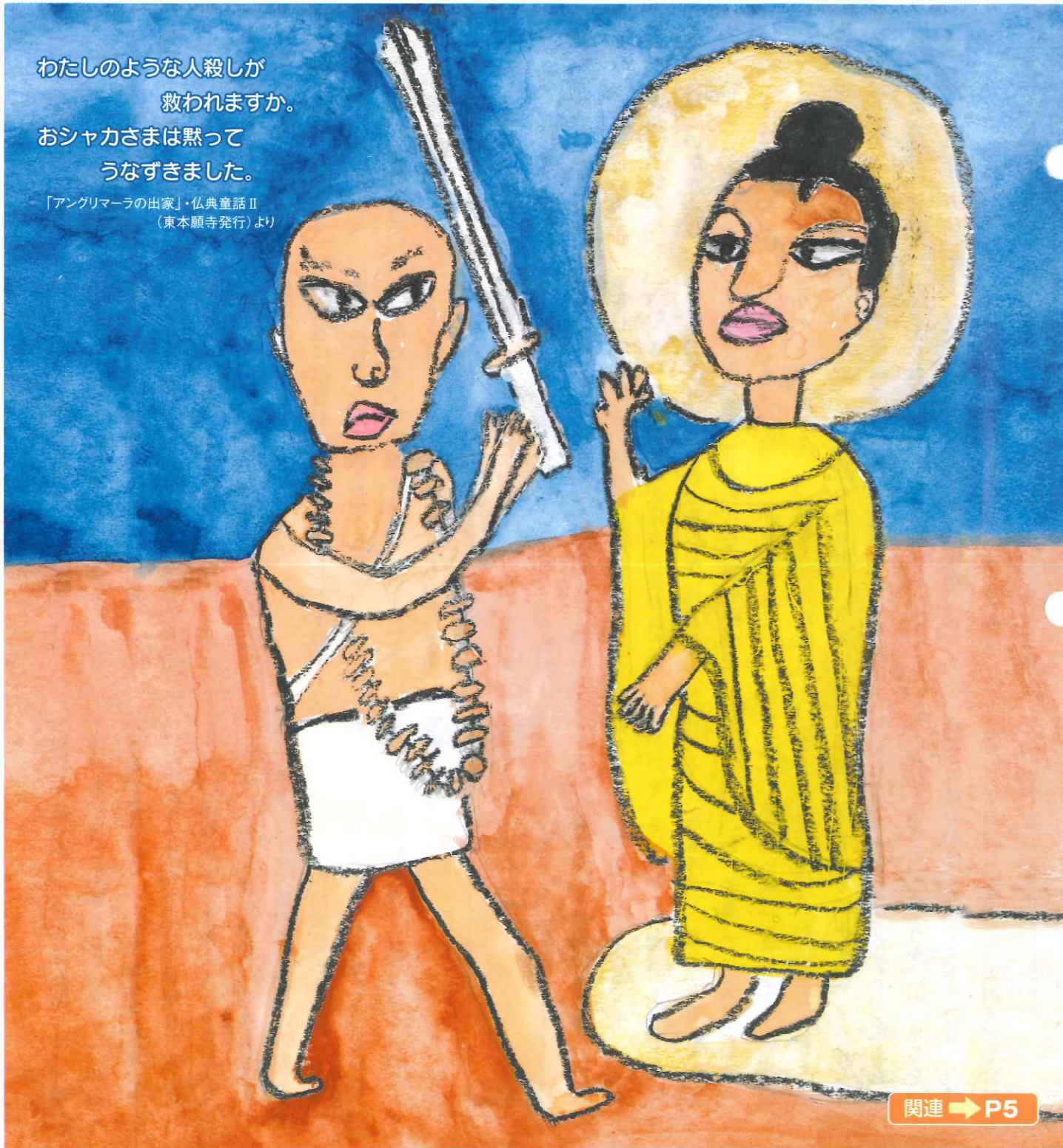


GIFU DOBO

特集「二河白道」をゆく 未曾有の危機に直面して— (高 史明) ● ぶつじあれこれ
『仏典童話』を訪ねて ● シリーズ 真宗の歴史 本山再建と郡上和良筋門徒 ● インド放浪



わたしのような人殺しが
救われますか。
おシャカさまは黙って
うなずきました。

「アングリマラーの出家」・仏典童話Ⅱ
(東本願寺発行)より

関連 → P5



インド
放浪
INDIA

写真・文/吉田 慧

私は一ヶ月近くインドとネパールを放浪してきました。その間、たくさんのお金をする人達を見ました。どこへ行っても、たくさんの人々に囲まれ「マネー・プリーズ」の合唱です。中には小さな子どももいます。最初は「嫌な国」だとか、「かわいそう」だとか感じました。そして、「日本に生まれて良かった」と思っていました。ある時、金銭的に貧しい人が沢山いるインドで、なぜ、人から施しを得ている人がこんなに沢山生きているのか疑問に思いました。その疑問を抱きながらインドを放浪しているとあることに気づきました。彼らは施しによって生活できるのです。それも観光客や特定のお金持ちの人だけがしているのではなく、手を出しているその人よりも少しでも恵まれていれば、施しをしているのです。



景を見たことがないし、自分もしたことがない。ただ見ているだけ。そびえ立つ高層ビル群の中で、誰にも相手にされず、ゴミ箱をあさる日本のホームレス…。一方、色々な人から施しを受け、そのお金で得た食料を家族で分け合うインドの物乞いをする人…。インドの物乞いと日本のホームレスは比べるものではないと思います。しかし、そんなことを考えると、自分の感じた「嫌な国」、「かわいそう」、「日本に生まれて良かった」という感覚の軽さに嫌気がさしました。日本では何もしない、ただの傍観者でいられます。でも、インドでは物乞いの人達がダイレクトに訴えかけてくるため、どう向き合うのかを常に問われます。最近、ホームレスを見るとき、遠いインドでの風景が思いおこされます。(摩耶)

編集後記

春、花も虫も鳥も生きものたちが
いっせいに動き始めた。
落葉樹の、新しい萌え出た葉は、
それぞれ色も形も違って、
自然の造形の素晴らしさに感嘆!
自然界の力強さに比べて、
人間の、なぜか疲れた顔が
気になるこの頃…。

(摩耶)

特集 短期集中連載②「二河白道」をゆく 未曾有の危機に直面して—

高 史明



「我今回らばまた死せん、住まらばまた死せん、去かばまた死せん。一種として死を免れざれば、我寧くこの道を尋ねて前に向こうて去かん。すでにこの道あり。必ず度すべし。」

有名な「二河白道」の喩えです。人間は万人が、いつかはこの生死の窮みに立たされるのでした。何人もこの人生の窮みを逃れることはできません。不幸な人生を送ってきた人にも、また仕合わせな日々を送ってきた人であっても——。ところで、人はこの終末の窮みに立たされたとき、何を思うのでありましょう。賑やかだったはずの人生も、振り返れば深い孤独の深淵が見えてくるに違いありません。或いは、煌びやかな成功街道だったはずの人生が、実は「群賊悪獣」の群がる汚濁塗れだったことに気づくこともあるに違いありません。人生の真相は、その終末に至って初めて見えてくるのでした。

ところで、昨今の世界状況は、まさに人間のこの終末状況を呈し始めているのではないのでしょうか。アメリカ発の金融恐慌が、世界中に恐ろしい速さで伝播したのは、昨年の秋からでした。アメリカがくしゃみをする、日本は肺炎になるといふ皮肉がありました。

が、昨今の日本にも深刻な事態が統発しています。2008年の年末には、首都の日比谷公園に派遣労働者のテント村が出現しました。昨日まで日本の繁栄の牽引力であった先進企業が、突然、派遣労働者を次々に路上に放り出したのです。年末のテント村では、炊き出しも行われていた。

まさに未曾有の危機です。2009年の年明けには、アメリカ議会の予算局が、2008年の財政赤字の予想を修正していました。4550億ドルの赤字予想だったものが、1兆1860億ドルの赤字に修正されたのです。日本国にすると、実に110兆2980億円の赤字です。イラクに張り付けている15万人からの軍事費だけでも、月に1兆円かかると言われていました。その財政操作術の無理が祟って、いつきに信用収縮の大津波に襲われたのでした。アメリカは大きな税収減に襲われる一方で、危機乗り切りのための財政出動を余儀なくされたのです。新しく大統領になったオバマ氏は、ブッシュの独善と強権路線を見直しつつ今日の危機を乗り切り、世界に對話と協調の状況を作り出そうとしていると考えられます。

しかし、昨年末にはイスラエルが、パレスチナ自治区のガザに大規模な空爆を開始する事態が発生しました。しかも、年明けで戦

車軍団が地上からの侵攻も開始した。国連が設けた学校も砲撃されていました。40名の児童が犠牲になつてい。最初の空爆から半月足らずの現在(1月13日現在)、パレスチナ人の犠牲は800名を超えていると見られています。世界恐慌の最中に勃発したこの戦火は、さらなる大戦の導火線になるのではないか。1929年の恐慌は、その後第二次世界大戦の導火線となつたのでした。しかも、今日は核兵器が世界中に張り巡らされている時代です。



「末法五濁」という目線がありました。人間とは、その歴史の積み上げとともに、足下の黒闇をいよいよ深くしてゆくのでした。時代の濁り、思想の濁り、欲望の濁り、人間の資質の濁り、命の濁り。近代文明の始まりとともに人間の五濁はいよいよどす黒いものになつていのではないか。「足るを知る」という悟りが、しきりに説かれるようになりました。足るを知られば、首切りも飢えもなんのそののでしょうか。いや、足るを知れば、五濁の間はいよいよ深まるに違いありません。では今日の黒闇は、人間の宿業にほかならないと諦めておればいいのか。



いや、親鸞聖人は「歎異抄」に言い切っておられたのでした。「いずれの行もおよびたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と。親鸞はまさしく人間の黒闇が、鎌倉期の全体を真っ黒に締め付けてきたとき、その地獄のただ中にすつくと立たれたのでした。「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀に

たすけられまいらずしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の仔細なきなり」と。そしていま、ここに

1461年の冬・京都が顧みられてきます。東福寺の禅僧に次の記録がありました。「四条橋より上流を眺めると、死屍累々として鴨川をふさぎ、腐臭が鼻をついた」と。その冬の京都で

は、一月と二月の2カ月間に実に8万2000人からの餓死者が出たのでした。毎日のように積み重ねられてゆく遺体によって、鴨川が埋まったと言われている。ところで、蓮如が親鸞聖人の教えを人々に発信したのは、まさにその地獄の三月のことだったのでした。「——タトヒ名号ヲトナフルトモ、仏タスケ

タマヘトハオモフベカラズ」と告げた。

蓮如のこの第一通のメッセージは、まさに「地獄は一定」と告げられた親鸞の声とびつたりと呼応しています。そして、蓮如の第二信の結びは、次の言葉でした。「マタ親鸞聖人ハ、真実信心必具名号、名号必不具願力信心也」トオホセラレタリ。」

思えば、親鸞聖人は「教行信証」の(信巻)に開示していたのでした。「金剛の真心、これを『真実の信心』と名づく。真実の信心はかならず名号を具す。名号は必ずしも願力の信心を具せざるなり。」人間とは、危機に直面すると叫び声を上げるのでした。その叫び声とは、まさに「いのち」をも私物化している「私」中心の叫びになるのでありましょう。「仏タスケタマヘ」と叫ぶ。蓮如はその人間の五濁を見抜いていたのでした。

親鸞はまた明示していました。「おおよそ大小聖人・一切善人、本願の嘉号をもつて己が善根とするがゆえに、信を生ずることあたわず、仏智を了らず、かの因を建立せることを了知することあたわざるがゆえに、報土に入ることなきなり」と。人間の業のなんという黒闇でありましょう。いのちを私物化する人間は、名号をも我が物にしてゆくのです。「末法五濁」とは、人間の黒業にほかならないのでした。そうであれば、黒闇が刻々

と深まりつつある今日は、「足るを知る」では間に合わないのです。黒闇が人間の業であるなら、人間はその黒業のただ中に心身の丸ごとを上げて生きるほかならないのです。

思えば、室町の地獄のただ中に親鸞の声を真つ直ぐに発信した蓮如の下には、たちまちにして雲霞のように人々が結集したのでした。その人々の結集は、蓮如が「王法・仏法」の二元論に迷つてゆくとき、急速に真の意味での力を失っていますが、今日なお親鸞の真実は完全に失われてしまったとは思えません。「数の魔力」の間が深い今日ならばこそ、いよいよ真実の智慧が世界中で求められていると言えます。「末法五濁」の時代は、まさに「地獄は一定すみかぞかし」の大道を生きたるときです。現世の知恵もまた、その瞬間から生きてくるのでありましょう。

「汝一心に正念にして直ちに來れ、我よく汝を護らん。」阿弥陀は黒闇のただ中に告げておられるのでした。



高 史明(たかみ さん)先生
1932年生まれ。作家、評論家。
山口県生まれ。本名・金天三。3歳にして母と死別し、石炭仲士であった父に育てられる。高等小学校中退後、職を転々としつつ政治活動などを行う。1971年、初の著作を上梓。評論家となり、1975年、『生きるこの意味』で日本児童文学者協会賞を受賞するが、同年、一人息子の岡真史が12歳で自殺。その遺稿詩集『ぼくは12歳』を妻の岡百合子との編集で刊行する。その後、『歎異抄』を通して親鸞の教えに帰依し、著作のほか、各地で講話活動を行う。
著書『世の中安穏なれ』『悲の海は深く』『念仏往生に導かれて』等多数

『仏典童話』を訪ねて

あらすじ

『仏典童話Ⅱ』(東本願寺発行) 第八話 「アングリマーラの出家」

ある町に若いバラモン(修行僧)がいました。かれはあまりに優秀だったので先生からも深くねたまれました。ある日先生は彼を呼び出し、「千人殺してその指で首飾りを作るのだ。それが出来上がったときお前のさとりは完成するだろう。」と命じました。先生に呪文をかけられた剣を手に持ち、かれは町に出て人を次々に殺していききました。人々は殺人鬼となったかれをアングリマーラ(指で作った首飾り)と呼びました。千人目を探しているところで母を見つけました。止める母をも殺そうとした時、そこに別の人がかげを見えました。今度はその人かげに斬りかかろうとしますが、近づくことも斬りつけることもできません。その人かげはアングリマーラを救うために神通力を使ったおシャカさまでした。力尽き倒れたアングリマーラにおシャカさまはやさしく言いました。「わたしこそあなたを待っていたのです。」呪文がとけ、恐ろしい夢からさめたアングリマーラは指の首飾りを見て自分のしたことにわなわなと震えました。「わたしのような人殺しが救われますか。」たずねるかれの眼は真剣でした。おシャカさまは黙ってうなずきました。そして、おシャカさまはその殺人鬼ともいふべき男を心が翻ったとして弟子に加えることを許したのでした。

ぶつじ あれこれ

日常私たちが仏事に関わる中で、これでいいのかと半信半疑であったり、知っているつもりでいても違っていたりとか、正しくはどうなのかということがあります。

真宗大谷派としての作法を今一度確かめていくとともに、形として現されているところに真宗の願われている教えにも気づいていきたいものです。

1 お焼香の仕方

焼香すべき尊前にすすみ、御尊前を仰ぎみて、身を正し頭礼(軽く頭を下げる)をします。次に右手で香盒の蓋をとり、香盒の右に置きます。御香をつまみ、香炉に入れます(一回)。そして右手の指先で香の乱れを整えて香盒の蓋をし、両手で香炉の蓋をします(続いてお焼香をする人がいる場合は蓋をしません)。

合掌をしたあと頭礼をし、もとの席にもどります。

- ・お焼香をする時、御香を頂くことはしません。
- ・御香の煙をおおったり、身に付けたりしません。



2 念珠の持ち方・合掌の仕方

念珠を手に持つ時は左手に持つか、あるいは左手首にかけておきます。

一輪の念珠の場合は常に房・珠の親玉を親指で押さえ、房を手の外側に下げます。

二輪の念珠の場合は常に念珠の親玉を親指で押さえ、房を床・畳に置いたり、繰ったり、こすり合わせて音をたてたりしません。

合掌するには、まず念珠を持った左手を胸部にあげ、次に右手を左手の念珠の輪に通して

合掌します。掌の角度は約45度に保ち、合掌したときは、十本の指と両掌は離れたり浮かしたりせず正しく揃え、合わせた掌が丁度みぞおちの辺にくるようによします。

3 打敷について

金欄などでつくられた三角形の敷物で、前卓と上卓にかけます。打敷は平常にはかけません。これをかけるのは、祥月命日以上、年忌法要・中陰法要・正月・春秋彼岸・お盆・報恩講・結婚式など、特別の行事のときです。中陰の間には白地の打敷を用いますが、正月・報恩講には明るい華美なものを用いるなど、



なるべくその法要にふさわしい図柄・色目のものを用いるのが望ましいとされています。

打敷は、卓に燭台や香炉を置くときの敷物です。正式には正方形の形をしていて、正面から見た場合、三角形に見えるようにかけるのですが、現在では三角形の部分を残した略式のものとなっています。打敷の上には「建水板」(水板・げす板ともいふ)を置きます。

いよいよ5月から裁判員制度が始まります。私たち一般人が罪を犯した人を「裁く」ということです。それはまた殺人事件等の重大な案件に限られるので、現実的に極まった言い方をするならば、被告人を「死刑」にするか否かの判断を私たち自らが下さなければならぬことを意味します。そこでこの制度の運用が、私たちに何を求めているのか考えてみたいと思うのです。

「凡夫が救われるということ」 ——救し合える社会の実現——

——裁判員制度の運用を目前にして思うこと

「死刑」(死をもって罪を償うこと)制度として「死刑(死をもって罪を償うこと)制度」をどう考えるかが問われます。裁判員として現場に立たされたとき、私たちはなにを基準に、どう人を、罪を裁いていくのか、大変重い課題を背負うこととなります。その罪がどんなに重いもの

であったとしても、自らの犯した過ちに気づかない状態がどんなに長くとも、その人自身の心の向く方向が翻ることを私たち仏教徒は「回心(えしん)」といただきます。私たちは誰もが、凡夫として、思いがけず罪を犯す可能性を持っています。お互いがそういう存在であることを認め合い、救し合える社会の実現こそが我々凡夫のほんとうの救いになると願われているのです。他者を否定し排除していくことは、共に生き合う社会の否定につながり、私自身の存在の否定にも繋がっていくからです。いよいよ5月から裁判員制度が始まります。

責任能力を認められた上での判決でした。どんな事情があるにせよ家族5人を死に至らしめた罪は重大です。当然死刑の判決かと思われましたが、極刑を回避したその要因として遺族が「死刑を望まない」ことが挙げられました。もうこれ以上親族から新たな血を流すことを望まないとの遺族の思いが量刑を左右したということでした。被害妄想を抱き心身耗弱状態であった祖父を救したということでしょうか。司法の「犯人の死をもって遺族が救われ



本山再建と郡上和良筋門徒

歴史と土居葺板

京都東本願寺は、江戸時代の中頃から後期にかけて76年間(1788年～1864年)に4度の火災に遭いました。四度目の火災では1864(元治元)年、長州と幕府軍との交戦、蛤御門の変の兵火によって、御影堂と阿弥陀堂の両堂以下諸堂を焼失しました。

現在の両堂は、焼失から15年後の1879(明治12)年に時の東本願寺第21世・巖如上人から、全国の寺院・門徒に向け本山再建の呼び掛け「発示」が出され、翌1880(明治13)年新始式が行われてから実に15年の歳月を要し、1895(明治28)年に完成しました。これは真宗仏教・大谷派教団の存立をかけた大事業であり、その間の全国の門徒による資金・資材の献納ははかり知れません。

近代明治期の本山再建にあたり、郡上の各地門徒より材木や足場資材などが献納

それら板材のほとんど全てを郡上和良筋の法中門徒衆が調達したのです。

郡上の人々

郡上和良筋では明治13年に相当多くの土居葺板寄進のうごきがあって、翌14年の御影堂屋根板の悉皆献納を決定したことが資料によりうかがえます。これほどの大きな事業を郡上の和良筋門徒がどうして引き受けられたのでしょうか。

思いもおよばぬ懇念が込められたとして、原木伐採の現場、加工の方法と手間、運送の手段と道筋がともなっているのです。しかし、わからないことが多く、まだまだこれから解明されなければなりません。これら板材の調達と運送について郡上市和良町の酒井銀



和良から京都・本山までの搬入経路

されたという伝えはありましたが、詳細はわかっていませんでした。当時本山の動きを報せる「開導新聞」に、

明治14年11月、岐阜県郡上和良筋の法中門徒一同から、今度の本山再建に瓦下屋根板をすべて杉材で一万三十四束を献納したいと郡上の覚証寺住職・後藤泰徳、長敬寺住職・千葉俊朝の両氏から、このほど何書が出された。本山再建局からすぐ了承の指示が出て、板の木質と厚さ等は事前に御下附された雛形のように、厚さ四分(1.2cm)、幅三尺(91cm)、長さ一丈二尺(363.5cm)とする。

なお右の屋根板は郡上和良筋より白山会社へ明治15年3月11日までに四分の一を寄付・運送して、残りは後三ヶ年間に皆すべて運搬することに決定した。と記されていました。

今度の本山御影堂の修復工事で屋根瓦をめぐり、葺土を除く作業の過程で「瓦下屋根板」に相当する「土居葺板」が大量にみつかったのです。「土居葺板」(屋根の野地板)の「土居」は、むかし集落や屋敷地を囲んだ防壁で、土を積み上げて壁の内外両面の下から順に上へ瓦を斜めに葺き重ねたものでした。

その手法により瓦屋根の下地に板材を何枚も重ね葺きしたのが「土居葺板」なのでした。

之助氏の推測があります。氏によると、《和良には杉の良材があり、幹の「あかみ」と称する部分は腐りに強く重宝された。また地元には林業に従事する職人が多く技術を持っていた。原木を里へ搬出する前に、伐採現場で加工して乾かして軽くした。八幡へ和良筋の各地から負荷で堀越峠を運び、八幡の運送会社へ着けた。その後荷馬車で郡上街道を長良川畔の大矢・大原(現在の郡上市美並町)の漆に運び川舟で伊勢の桑名港へ着いて大型船に積み替え、大阪港に至り淀川沿いに京都へ着いた》とされています。

日本近代における東本願寺再建事業の全体が見えてくるなかで、郡上和良筋門徒の土居葺板の悉皆献納のことがわかってきましたがその実態はまだ解らないところが多く、ここでは一部を伺ってみるに過ぎません。巨大な丸柱や虹梁、荘重な屋根に並ぶ瓦にも感嘆させられますが、屋根の下の光の当たらない暗がりに敷きつめられた、膨大な葺板の枚数にも畏敬を覚えます。その土居葺板の全部を郡上和良筋の門徒衆が引き受けて献納したのです。期間は1881(明治14)年から1888(同21)年まで八ヶ年におよびました。そのあいだ郡上和良筋の山と里は杉板の加工場になったのでしょうか。森林を持たぬ人

土居葺板に墨書がみつかる

御影堂屋根の瓦をはずし、葺土を除く作業が進むなかで、土居葺板を固定する釘をはずし板をはがすと、いたるところに墨で書いた文字が見られるようになりました。御影堂屋根の全面にわたり瓦と葺土が取り除かれ、土居葺板の点検がなされました。その際にみつかったのが墨書です。そして墨書に記された板材寄進者の国許・氏名を丹念に調べた結果、そのほとんどが「美濃国郡上和良筋」各村々の人名でした。御影堂屋根の延べ面積は7500平方メートル、土居葺板約25万枚ともいわれますが、実際の枚数は25万枚をはるかに超えるようです。



御影堂瓦屋根下より見つかった、墨書入りの土居葺板

は資材の杉を買って納めました。もちろん田畑を耕さねばなりません。炭焼きや養蚕も休めません。女の人も子ども達も杉板を抱えたり背にしたりして運んだことでしょう。老人たちも男女の別なく「御本山の屋根葺板」として敬い、身に添う仕事をつくして浄土を願ひ、いのち果せて逝った人もいました。

生きるってどういうこと

生きるということとは、「いのち」の遠い根源を思い、共にめざめ、たがいに深めていくことではないでしょうか。

百二十余年あまり前に郡上和良村から京都へ出て行った杉板が、昨年初夏、ふるさとの郡上へ帰ってきました。曾祖父の名を目にし、「私のご先祖が明治期の両堂再建に携わったことを知り驚いています。時代を超えて曾祖父の生きた足跡を感じることができたことは非常に貴重な経験です」と……。

むかし杉材が生まれ育った故郷郡上の山から京都へ運ばれ、墨書された献納者の名とともに御影堂の屋根を護ってきたのです。「いのち」というものは、身近にありながら気づかず、忘れられ、知らされてこなかったところに、願いとなって生きつづけていたのです。

【参考文献】大谷大学名誉教授 名畑 崇氏「本山造営と郡上の人びと」